

# いま **この** 動物園がおもしろい!!

こんな動物園、そんな水族館あったの!? 今号は、正田先生がお勧めする「上野動物園」「富山市ファミリーパーク」「埼玉県こども動物自然公園」3つのユニークな動物園情報をお届けします。

## 元祖サル山

上野動物園のサル山は、1931(昭和6)年に造られたもので、その素晴らしい設計と左官職人の技能が相まって、モデルとなった千葉県鋸山のこぎりやまをみごとに再現しており、全国のサル山展示の先駆けとなりました。

サル山は自然とはかけ離れているとはいえ、岩山の裏側に樹林帯があり、たまたま岩場にサル達が出てきているという風に捉えれば、さほどおかしなものでもありません。寧ろ、サル達の行動の面白さが際立って見られる素晴らしい施設だと思います。サル山と一口に言っても、いろいろな形のものがありますが、上野のサル山は劇場型で正面からしか見ることができないようになっているため、サルは裏側に行けば人の視線から逃れることができます。他のサルの視線から隠れる場所も上手く造られていて、これらがサル



達の精神状態に安定をもたらしているのか、上野のニホンザルは、昔から毛並みが良いようです。

私は育種が専門ということもあり、限られた小さな群れがどこまで遺伝的に継続できるかに関心がありました。昭和30年代に6頭のサルが導入されてから約60年、一度も他からの遺伝子の流入がなかったのに、奇形が出ることもなく8代目まで続いたのは、驚くべきことでした。これは、当時は亜種とみなされていなかった宮崎県のホンダザルと鹿児島県屋久島のヤクシマザル出身のサル達が創始個体で、遺伝的多様性が高かったためでしょう。2009(平成21)年に青森県下北半島の出身の北限のニホンザルに替わりましたが、今も、群れがどこまで維持されるかには興味を持っています。



1987(昭和62)年、サル山に「体重計」が設置されました。東園飼育係第2班と東京動物園ボランティアズ・ニホンザルグループのメンバーは、この体重計に乗るニホンザルの記録を続けています。10年ほど前ですが、この記録を分析したところ、一定の餌を与えているのに、野生と似たような体重の季節変動が見られること、特にオスの体重は交尾期の前後で大きく変化することがわかりました。これは非常に面白いことで、家系や順位などとの関係もあるのだろうか、更に興味が湧いてきました。

私は、職場である東京大学農学部に通うのに、健康にも良いだろうと上野駅から上野公園を歩いて通り抜けていました。この時期、挨拶を交わし合うサル達(ブタオザル、クモザルなど)がいて、サルに興味を持ちました。その後、動物園ボランティアを立ち上げ、一員になってからも趣味としてサル山の観察を続け、今日に至っています。

実は、数年前、私が生まれた日は、上野動物園の動物園大改造計画が発表された日に当たり、この計画の中にサル山建設も入っていたことを知りました。上野のサル山とは、生まれた時から縁があったわけですね。

東京大学名誉教授 正田陽一

挨拶を交わし合うサル達(ブタオザル、クモザルなど)については、P11のこの「個」に注目番外編～私の昔馴染みでも紹介させていただいています。



## 里山を活かした日本型動物園の構築を

若い人には知らない話で恐縮だが、かつて「連想ゲーム」というNHKの高視聴率番組があった。キャプテンが発する言葉から答えを連想して当てる番組だ。「上野動物園」から連想する言葉。多くの方は「ジャイアントパンダ」だろう。でも私は違う。私は「正田陽一」。

長身をすくっと伸ばして園内を歩き、ニコニコと資料室に鎮座する。上野動物園でいつも見られた姿だ。欠くべからざる風景だ。そして夢を語る若輩者の我々をいつも叱咤激励してくださった。公益社団法人日本動物園水族館協会顧問として日本の動物園の行く末をいつも心配してくださった。

先生から私は動物園の多様性を学んだ。それは、今、富山において、私が30年余、人生を重ねてきた富山市ファミリーパークに息づいている。人と自然が交錯し続けてきた里山。その知恵に習い、里山を人と動物がともにあるべきことを感じ、知り、学び、実践する場に動物園を転換する試みに。それは「いのち」を繋ぐプロがいる動物園で、加えて里山が展開する地域の動物園で可能なことだ。私はそれを日本型動物園の創造と思っている。

その正田先生が、2015年3月に米寿を迎えられた。おめでとうございます。いつまでもお元気で。そして、いつまでも若輩なる私の、富山の試みに、いつまでも鞭を。



富山市ファミリーパーク 園長 山本茂行

## ハンドメイドズー

埼玉県の比企丘陵に広がるこども動物自然公園は、春や秋には幼稚園や小学校の遠足でにぎわい、1年を通して多くのリピーターに支えられている動物園です。

園の特徴の一つが「手作り感」。35年前の開園当初から、ラベル、看板、小さな動物舎まで飼育スタッフがアイデアを出しあいながらハンドメイドで作ってきました。

「ペンギンヒルズ」や「カピバラ温泉」など新しい施設の予算がつくこともあります。その際には、まず理想とする施設のイメージ図を描き、スタッフ同士の意識や方向性を統一しておきます。実際に建設が始まると、プロの方たちの力を借りつつも、穴を掘り、池を作り、木を植え、種をまくのはスタッフです。他の動物の担当者も時間を作って集まり、所長や園



長までもが手にスコップを持ちます。そこには色々な感性が関わるからこそその利点もでてきます。「動物が楽しくて幸せで安全なすみか」をめざして、何度も話し合い、意見を伝え、時には言い合いも。でも、このプロセスこそがスタッフ一人一人の力を高めていくことにつながると信じています。

正田先生が「こども動物自然公園の施設が好きなんです。」とってください。それはとても有り難く、私たちの支えとなっています。もしかすると、手作り展示に四苦八苦するスタッフへの激励の言葉でもあるのでしょうか。

次の「この展示いいですね。」を目指して、動物も人も居心地のよい施設をつくってあげたいと思っています。

埼玉県こども動物自然公園副園長 兼 展示普及課長 田中理恵子

もっと面白いこと知っているわ！ ここがお勧めよ！ など、皆さんからのご投稿をお待ちしています。400～500字くらいの文章と写真2～3枚をEメール、もしくは郵送で、市民ZOOネットワーク事務局までお送りください。お待ちしております！